

最南端高校・教師おとひめ

藤田 侃

日本三大民謡のひとつを持つその町は、トンネルを抜けるとそこは雪国ではなくオトちゃんの故郷、本州最南端の海辺の地であった。彼女の父はここに総合病院を開業する医師で、田舎の名家のお嬢様として、ピアノにお茶、料理と幅広い教養を身に付けていた。

彼女が奏でる「エリーゼのために」は隣人の心を随分和ませたらしい。またその愛くるしい容姿は、小さな町のマドンナとして名を馳せていたが、その勝気な振る舞いのおかげか本気で近づく若者はいなかった。

オトちゃんと呼ばれていた彼女は長じて、京都のD女子専門学校に入学する。当時のD女専と云えば、近郷のお嬢様が集まる、今でいう名門のお嬢様大学だった。

卒業後、何年かの花嫁修業の後、医師である叔父の紹介で、大学の後輩の内科医との縁談がまとまり、新居を京都の岡崎に構えることとなった。相手は医師にして剣道五段の猛者で、後輩からはケンさんと慕われていた。

オトちゃんはこの京都岡崎で男の子ばかり三人をもうけることとなる。正しく幸せを絵にかいたような人生の始まりであったが、それも長くは続かなかった。ケンさんに一通のはがきが届いた。いわゆる赤紙であった。

この時、長男は七歳、次男四歳、三男のタロ君は一歳であった。ケンさんは大学医学部の講師をしていたが、戦闘激しいビルマ野戦病院に軍医として出征し、そのまま帰らぬ人となった。

ケンさんの戦死の連絡を受けて何年後のことだろう、オトちゃんは父親に高校の教員として働きたいと相談したところ、ひとこと、

「それも良からう、やってみなさい」と即座に賛成したらしい。

それからの彼女は三人の男の子を育てながら、定年を超えて三十五年もの間、県立高校の教員として充実した人生を送ることとなる。

その間、終生ひとり、子供達、教え子、亡き夫の三人格に対し、愛と反戦の意思を伝え続けた。「戦争はいかん」が口癖であった。

父母が亡くなっても、故郷の大きな屋敷にはいつも何人かの同居人がいた。離婚して帰ってきた妹、病弱の独身の叔父、また下宿生が二人。加えて、訪れる同僚の男の先生たちも二人いた。その家を切り盛りする忙しい生活は退職しても続き、三男のタロ君にはオトちゃんと話し合える時間が少なく、逆に寂しく感じる時間が増えたようであった。

先生方が来られた時はいつも長く、好きな時間ではなかったらしい。ただ、お茶の運び役はいつもタロ君で、お茶の用意が出来るると必ず声がかかり、お茶運びのあと、しっかりと挨拶と仲間入りをさせてもらった後、タロ君は自室で勉強に励むのが常であった。

そんな特に長い日、その時の口癖は、

「いつ帰るのかなあ」

と声なく呟くことであった。

オトちゃんは、大きな野望を持っていた。

それは家を大事に、父親、夫の後を継いで息子を医者にしたい、願わくば三人とも医者にしようということであった。

そのために、息子たち三人を順に京都の知り合いの家に下宿させ、医師にするための学習環境を整えようとしていた。

結果として、医師になったのは長男ひとりであったが、次男も三男も沢山の友達との交流を保ちながら、嘘のない充実したサラリーマンから経営者への生活を満喫していた。

京都生まれのタロ君は一歳半の時、この地に疎開し、中学卒業まで過ごしたため、友達も多く、今でも同窓会などで帰省することが度々あった。その時々には味わう楽しみはオトちゃんが医師として著名であった父を追い越し、高校教師として生徒たちの憧れの的となり、その凜としたたたずまいは町でも評判になっていったことだと話す。

オトちゃんは大学の家政学部を卒業、先生として家庭科を担当し、料理、被服への素養を積み重ね習得していった。また青春真只中の若者たちとの交流のお蔭か、いくつになっても若々しく、担当する部門で新しい作風を編み出し続けていた。

その源の一つは「暮らしの手帳」で、付録に付いている型紙を利用して作る新しい洋服の数々であった。そんなワンピースを着て、田舎の街を闊歩する様は今でも語り草となっている。京都の街を訪れる時の練習をしていたのだろうとタロ君は言う。

オトちゃんの故郷は海の街、忘れられないスポットについて、タロ君の思い出がある。

それは灯台の真下の決して灯台の明かりが届かない岩場に守られた自然のプール。外海の太平洋が、台風などで少々荒れていても、その中はいつも穏やか。そして台風到来の時

は、逃げ込んできた珍客で満員になる。

巨大な釣ふぐ、うつぼ、ウミヘビ更にはグレや鷹の羽に加えてお茶目なサメの赤ちゃんたちが乱舞する。そこは伝説ではない正しく彼が中学の時、発見した竜宮城だった。

ある時、魚が出入りする隙間から、スツと泳ぎ出たことがある。そこには初めて経験する、全く知らない海の顔があった。水中は打ち寄せた波が砕け、泡となり牛乳をぶちまけたように一面真っ白で何も見えない。手を振り、足を蹴っても沖へと引く波に戻される。更に強く、岩を叩き、足で蹴り続ける。

呼吸が出来ない。もう駄目か。焦りと恐怖が押し寄せ、無我夢中に足と手を振り回し続けたその時、さっと目の前が開けた。

上に行くつもりが下へと逆に潜っていたのだ。幸いにもそこには泡が無く、引く波も穏やかで、帰るべき岩が目の前にあった。

その岩にかじりつき、必死の思いで魚たちが乱舞するプールの中に滑り込んだ時は全身傷だらけになっていた。

そのことを、オトちゃんに報告したところ、

「あなたも強くなったのね」

といった大きな口をあけて笑った。

彼女にとって、こんなことは瞬間の笑いで済ませられるレベルであったのだろう。

そんな彼も京都の高校に進学。夏休み、冬休みになると、オトちゃんへの土産話を携えてうきうきわくわくと帰郷する。何から話そうか、あれかな、これかなと順番を決めて、さあ話そうとした時、今度は必ず教え子たちが大挙してやってくる。またお茶運びか。

「早く帰ってよ」

ほうきに手拭いをかけ、願をかけるも効き目はなかった。

没後十年「オトちゃんの偲ぶ会」が催されることになり、幹事の方々と打ち合わせをする事になった。その時定年を迎えて文筆を趣味にしていたタロ君は、帰ってくれなかった残念なその時の様子を織り交せて、定年退職者の方へのメール本を自費出版していた。その自著を幹事の方々に贈ったところ、一人の大学教授から後日手紙での告白があった。「犯人は私です」と書かれていた。

五十年後の告白だった。腹を抱えて笑ってしまった。犯人が名のり出たよ。報告した。偲ぶ会への出席者一〇一名。多くの方が空の上のオトちゃんに向かって語りかけるその姿は、その時のタロ君への懺悔に違いない。

オトちゃんが担任した、その時の子供達が卒業する時、クラスの黒板に書き残した詩とオトちゃんの子供たちへの思いが残っている。

「卒業の翌朝」

『卒業です』

私たちの時代は終わったのでしょうか

私たち学友の声はこの校庭に眠り

私たちの笑い声は草木に隠れるのでしょうか

私たちの時代は化石となって

再び青い芽をふくことはないでしょうか

一体みんな何処へゆくのでしょうか

ベルが鳴り

ベルが終り

一日が終わり

一年が終わる

私たちも今昔の時代に入るでしょうか

ああ 青春という文字の響き

ああ 青春という文字の意味

私たちは何も知りません

ただ時の流れに身を横たえ

時の流れを流浪していたのでしょうか

もう卒業です

私たちの青春は

終わったわけではないのです

私たちの青春が

生まれたのでもないでしょう

ただ私たちは自然の掟に身をゆだね

すばらしき「時」を

ここに作り上げたのでしょうか』

彼等の去った翌朝、黒板に書き残されていたこの詩、

「私たちは進んで行くのです

不合理な社会を感じるだけでよいのです

多くの仲間がいるからです
私にくじけません」とも書いてあった。

「心配かけました

有難うございました

御元気で御過ごし下さい」

と四十四人がサインしてあった一枚の色紙。現代の若者はドライで無関心、無責任で無気力だという。でも彼等の中には今もロマンが息づき哀歎に反応し、純粹なものを追及する美しい心の失われていない現実を私は大切にしてゆきたいと思う。

最南端高校・教師 おとひめ（五十八才）